

着物に人生を魅了された母 岩畠玲子

岩畠寿尚



岩畠玲子

まもなくして私と弟が生まれ、しばらくは専業主婦として家の切り盛りをしていたのですが、蔵の中にある古い着物を見ながら、胸の内に着物への思いが少しずつ湧いて来ていたようです。

そんな折、ふと見たテレビCMで「装道きもの学院」を知りました。世の中には西洋文化が溢れ高度成長期が続いていた頃です。

そんな時代を感じながら、着物の文化を絶えさせないようになりたい、それはまるで何かに導かれたようでした。

三十五歳となっており、嫁であり妻であり母でもある立場、ただ、その思いは次第に大きくなり、思い切って家族に着付けを習いたいと打ち明けたようです。

結果、祖父や祖母、父も快く承諾してくれ、本当に嬉しかったと話していました。

ただ、祖父の「算盤をはじく、着物文化を伝える事に心せよ」の一言が基本にあるとよく言っていました。

上京し「装道きもの学院東京本校」に入塾してから昼は着付け、夜は和裁を学びながら努力し勉学に励んだと聞いています。

その後、無事試験に合格できて資格を取得し、授与式で



世界に着物を

は代表して謝辞を読んだそうです。

喜び高山に帰り家族の祝福を受け、昭和四十四年「岩畠玲子きもの教室」の看板を掲げました。最初の教室はお寺を借りたものだったと聞いています。その後、生徒さんも少しずつ増えていきました。

毎日の家事もこなしながら、それからは飛騨地域を中心に着付けと和裁・組紐教室で多くの方に教えながら和装の道を進んでいきました。

昭和四十九年には「岩畠玲子和装学院」を設立しました。

和装とは広い範囲に渡る事柄が多く、日本人の心とも言えるべき、先人が培った着物を大切に身に付け、礼儀作法や細かな心配りを「襟を正す」の言葉が表していると言っていたことを覚えています。

高山市勤労青少年ホームでは運営副委員長に就き、そこ

で若い方への着付けの講師を行ったり、伝統ある袴の着付けにも拘り、講座を開くなど力を注ぎ込みました。

海外の方にも着物を通して日本の文化を知って欲しいと、高山市デンバー友好協会の副会長を務めながら、外国人の方への着物体験をはじめ、色々々イベントに参加し、デンバーで二回、着物関連のショーも行いました。

高山市主催の「タイムカプセル」から飛騨・高山観光コンベンション協会での「飛騨高山きものさんぽ」では歴史ある町並みを着物や袴で多くの人に散策してもらう夢を持ち活動していました。

平成二十六年には研鑽を積んだ事も認められ、岐阜県伝統文化継承顕彰を受賞しました。



県伝統文化継承顕彰を受賞

和装を通じ、ボランティアをはじめ色々な行事に積極的に参加をしていた母を見ながら、人と接する事と着物が好きで、いつまでも元氣な人だなと感じていました。

「岩畠玲子和装学院創立五十周年」の発表会開催を七月に控えた平成二十九年の二月初旬、母は体調不良を訴え、精密検査の結果、膵臓癌の末期と診断されました。

いつも凜としていた母は、それを知っても、とにかく発表会に向けて講師の方々や生徒の皆さん、協力してくれる人達と頑張りましょうと平静を保っていました。

早ければ一カ月と宣告され

ていましたが、母の氣力も伴ってか、何とか無事に七月二日を迎え、皆様の尽力のおかげで創立五十周年記念発表会を高山文化会館で終えることが出来ました。

その三日後の七月五日に、母・岩畠玲子は八十五年の人生を閉じました。最後の最後まで着物に寄り合い、装いの心で襟を正した人生でした。

講師になられた方を始め多くの学院卒業生の方々と、ご協力を下さった皆様、今も装いの心を継承して下さっている事を嬉しく思うと共に、岩畠玲子和装学院もそのまま活動を続けております。